

[ゲンロク]

2023
JUN
No.448

6

定価 1100Yen

GENROK

Lamborghini Revuelto

衝撃のレヴェルト

[新フラッグシップ徹底検証] 12気筒NA+モーターの戦闘力

[12気筒マシン3世代] ディアブロ/ムルシエラゴ/アヴェンタドール

[60周年イベント現地取材] ミウラ/400GT/カウンタック

[最新世代雪上アタック] ウルス・ペルフォルマンテ/ウラカン・テクニカ
ウラカンEVO/ウラカンSTO



ポルシェ特選ショッブ

G.マレーが語るGMA T.33スパイダーの真実
ベントレー・ベンティガEWB国内初試乗

安 い値段の服でオシャレをするのは難しいけれど、高い服でオシャレをするのは比較的簡単だ。だから手っ取り早くオシャレしたかったら、いきなり高い服を買え、と作家にしてタレントにして歌手だった、故・野坂昭如が何かの本で唱えていた。自分のセンスに自信がなくて、一番、高い服を買えば間違いない。わかるような気がする。

に相談に乗ってくれるからだ。「服選びと同じで、クルマに乗る人が自分の趣味嗜好を踏まえてお店を選ぶ。僕はあくまで、僕がカッコいいと思うモノ、を提案しているだけで、最終的にはお客さんに判断してもらえればいいと思っています。今ではいいお客さんが大勢いらっしやるので、自由にカスタムさせていただけに感謝しています」やるからには彼はいつも本気だ。ユーザーと会い、話を聞いて、趣味嗜好、クルマの使いかたなどを熟知する。そのためにはプライベートをもにすることだ。決して珍しくない。



「コーディネート術なんて、ちゃんと学んだわけではないですけどね。業界に入らたての頃は同業者の先輩がつくるクルマを参考に。最初はモノマネから入ったといえそうなんです。頭張ってSEMAへ通い続けたりしながら、アメリカのカスタムカルチャーを見よう見まねでやってみたりして。そうやってトレンドを見ながら、ちょっとずつ自分らしさを加えていった感じ。昔からファッションが好きだったから、ノリは一緒なのかもしれない」そうやってひとつずつノウハウを蓄えてきた。クルマ業界のセオリーを持ち込むだけではなく、10代の頃

ザ・ファッショニスタ

EC.SPEC Mercedes-AMG GLS 63

福岡に本拠を置くECスペックに、熱い視線が注がれている。同店の井口拓也氏が描くのは、常に最先端トレンドを意識しながら、時にトレンドを牽引するような独創的なカスタムカーばかりだからだ。その技術とノウハウを、あふれ出るセンスを、そして彼の想いを、完成間もないAMG GLS 63を前にして紐解いてみたい。





プラス800などコンプリートカーの要素を取り入れながらオリジナリティを演出。カーボン製ボディパーツ、エキゾーストシステムなどを取り入れつつ、ステルスフィルムによる全身マットブラックや、独自の色味を持つホイールは井口拓也流のコーディネートだ。ホイールは鍛造モノブロック「プラチナムエディション」。ステルスフィルムによるマット感とホイールやカーボンの質感など、全体が黒基調ながらも巧みに表情を添えている。

EC.SPEC × Mercedes-AMG GLS 63



「人間だってクルマだって“オシャレは足もとから”。
タイヤがわからなければホイールなんて選べない」

ここ他とは異なる個性がある。
プラス800のエアロパーツやホイール、マフラーを投入するだけではない。オープンリアアンブラックのボディカラーはステルスフィルムで全身をマットカラー化した。鍛造モノブロックホイール「プラチナムエディション（24インチ）」にしても「流行りのディッシュ系だったから」というが、それだけではなくツルシとはちよつと雰囲気が違う。
「コンプリートカーに用意されるブラックポリッシュ（シャドウクロム）はアフターパーツとしては手に入らない。単体で買えるのはポリッシュ仕上げだけ。だから、僕はそのアフターホイールを基に、ポリッシュを剥離して、ブラッククリアを塗ってコンプリートカーに寄せた。でも、本物ほつと色が薄い。そのあたりの違いは取ってわかるように差別化を図りました。一見、手が入っていないように思えて、実は手を入れているみたいなお感覚です」
最初からそうであるように思わせておいて、ステルスフィルムやホイール塗装などで工夫を加える。そのひとつと手間こそが唯一無二の世界観を築き上げているのだと知った。
「チューナーのコンプリートカーってけっこう難しい。そのまま仕上げたいたら、人と同じになってしまう。僕は同じベース車両で、同じパーツを使っても、ひと味違うクルマを作っていきたい。それがお店とか僕のカラーになるんだと思ってる」
ECスベックの手法は決して派手ではなく、飛び道具を使うわけでもない。気鋭のファッションイスタは、引き算の黄金律を駆使して自分の「色」を投入し、その上で徹底的にユーザーに寄り添う。彼のもとに駆けつけるユーザーが後を絶たない理由がわかった。（文中敬称略）

から、三度の飯よりも大好物だったファッションの感覚を持ち込んだのだ。昔から流行りの洋服屋を見つけては通い詰めていた。学生時代はお金がないので、ただ服を見て、店員さんと話すだけだった。サイズ感、色合わせ、色の足し算、引き算、ブランドミックスのバランスなど、そこで得た知見や感覚が、自然と彼のセンスを鍛え上げた。それが彼のクルマづくりにもつた。センスにまで発展したのだからおもしろい。
特に重要なのが足もと。「オシャレは足もとから」というのは人もクルマも同じらしい。ホイールとタイヤがキマれば、クルマは否が応にもカッコよくなるという。
「昔から、靴だけはいいものを、いつも綺麗にして履け、みたいな格言があつて。それは信じているタイプ。だいたい足がキマれば9割がたカッコよくなるって、人間もクルマも一緒なんです。その感覚でクルマと向き合っているのかもしれない」
しかし、世の中にはホイールブランドが多々ある。とりわけアメリカン鍛造系などは、色や仕上げ、ミリ単位のサイズオーダーができるだけに逆に難しい。彼はどうやってホイールを選んでいるのか。
「やっぱりタイヤを知らないホイールは選べないですね。世にあるタイヤ銘柄とサイズから逆算してホイールをオーダーするという流れです。同じ11・0Jに305幅のタイヤを組むにしても、タイヤやホイールによって雰囲気はまるで違うようになる。過去にさんざん失敗しながら、ひとつずつ学んでいきました」
そうした意味では目の前にあるメルセデスAMG GLS 63は、ECスベック、井口拓也の真骨頂と言える作品だ。基本は定番であるプラス800コンプリートのような風情だが、ど



博多中心部からクルマで15分ほどの場所に創業30年という歴史を持つECスベックがある。店内は多数のホイールやパーツ、資料などが並び、アットホームな雰囲気も相まって居心地のいい場だ。プロスポーツ選手をはじめ著名人の愛車を数多く手掛けることでも知られ、店内にはたくさんユニフォームが飾られている。タイヤホイール選びからクルマ全体のコーディネート、そして昨今では車両販売など、カーライフのことならなんでも相談できる。

